

5月3日 AM6:30 県安曇野庁舎駐車場に7名が集合し、車に乗り合わせ出発する。天候は高曇り。新緑が眩しい常念山麓を登り、一ノ沢登山口へ向かう。登山口で準備を整え、AM7:40 一列縦列で出発する。15分程で、樹齢300年以上の橡の木が立つ“山ノ神”に到着。皆で手を合わせ、登山の無事を祈る。



唐松林の中、雪の残る山道を登る



常念乗越上方へ延びる雪に埋まる沢



雪に埋まる沢筋を直登する

一の沢沿いのカラマツ林の中、雪の残る山道を登る。2時間程登ると沢が合流する河原に出る。展望が開け見上げると、豪快に聳える白銀に輝く常念岳を望む。ここは、本流と支流の出合となり、冬期間の雪崩の痕が痛々しい。アイゼンを装着して、荒れた雪崩痕の小山を登り降りして通過し、常念乗越上方へ延びる雪に埋まる沢筋を直登する。

一時間程登り雪の沢筋を詰めると、森林帯を挟む二股に出合う。そこで小休止し、竹竿の道案内に従って、左側の狭く急な沢筋を登る。一步一步雪を蹴り、踏み登り続けると、一気に高度を稼ぎ、徐々に白い稜線が近づいてくる。岳樺の低木帯を過ぎ、左に豪快な常念岳の岩稜線を間近に望むようになると、PM12:45 ようやく常念乗越に登り出る。突然正面に、槍ヶ岳から穂高岳への白銀の稜線が、その姿を現した。皆歓喜し、今までの登りの疲れも、いっぺんに吹き飛ばすようだ。



狭く急な沢筋



常念乗越に登り出る



槍ヶ岳から穂高岳への白銀の稜線

常念小屋で昼食を摂り中休止後、PM2:15 冬山装備を装着して、外出する。まず、乗越東側雪斜面を利用して、ピッケルを使用し、滑落停止の練習を繰り返し行う。その後、横通岳方向の斜面を登り、低木帯を抜けて振り返ると、白雪を頂いて聳える、常念岳の雄々しさに圧倒される。PM4:00 小屋へ戻り泊す。



滑落停止の練習

道標と槍ヶ岳



雄々しく聳える常念岳に圧倒される。

5月4日 AM5:00、高曇り、微風の夜明けを迎える。AM7:10 準備を整え、雪の山頂を目指し出発する。所々氷結した雪が残る岩の稜線を登る。最初アイゼンは装着せず、まず7合目まで登る。高度を上げると、高曇り空の北方彼方に、越後の妙高山、火打山など頸城三山が望まれ、西に向って双耳峰鹿島槍ヶ岳、針の木、立山連峰が厳かに聳え連なっている。

そしてこのまま岩の稜線を登り続け、前常念への分岐点9合目付近の雪斜面からアイゼンを履く。純白の雪斜面の登る西方に、槍ヶ岳の先峰が一層高く天を突き抜えて聳えている。



氷結した雪が残る岩の稜線を登る



常念岳山頂 2857m



アイゼンを効かし雪斜面を登る

AM8:40 常念岳山頂に、全員見事登頂する。「おめでとう！」皆と笑顔で握手を交わし合う。山頂は、道標と祠を残し、すっぽり雪に覆われている。山頂の南西斜面に陣取り、テルモスの熱い茶を啜る。正面には、白銀に輝く穂高岳連峰の雪稜が、手に取るように大迫力でそそり立っている。その景色に見とれながら、登頂時の為に用意した果実も振舞われ、皆で憩いのひとときを味わう。

南方向に、山頂から続く尾根伝いに雪に覆われた蝶ヶ岳が連なり、その後方に、中央アルプス木曾駒ヶ岳が白く望まれる。東に、南アルプス、八ヶ岳そして浅間山の峰々を微かに眺望し、私達は40分程展望を楽しんだ後、惜しみながら下山を開始する。



大天井岳、横通岳を背景に、雪斜面を登る



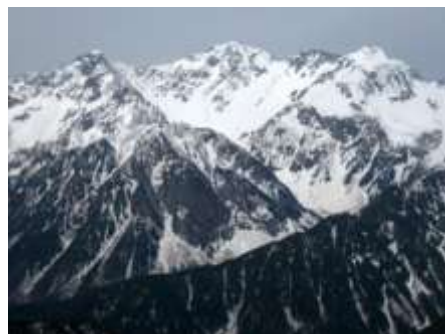
常念岳山頂 2857m に見事登頂



常念岳に生息する雷鳥



雪に覆われた蝶ヶ岳



白銀の穂高岳連峰



西に槍ヶ岳を望む

AM10:15、無事小屋に到着。熱いコーヒーで、体を温め、早めの昼食を摂り、AM11:10 常念小屋から下山を始める。往路と同じ雪の一ノ沢ルートを、滑落停止訓練をしながら降下する。PM2:50 登山口に到着。PM3:30、参加者の車が待つ県安曇野庁舎で解散とする。

「春浅い山麓と雪に覆われた常念岳山頂。その感動の登頂と安全な登山を支えてきた、常念小屋の皆さまに深く感謝を申し上げます。僭越ながら、常念小屋創設90周年を、心からお祝い申し上げます。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則